

「中小」は単なるミニチュアにあらず

日本病院薬剤師会理事
蕨市立病院薬剤部長
濱浦 睦雄 Mutsuo HAMAURA



今年度より中小病院委員会委員長を拝命致しました。何卒よろしくお願い致します。

当委員会では、事例集の発行やセミナー、シンポジウムの開催を通じて、中小病院における薬剤師の業務や部門マネジメントに関する情報を会員の皆様と共有し、その問題点と解決策を検討、提案することを活動の中心としております。

「中小」と規模で分類した場合、病床機能では急性期、回復期、慢性期など様々な病院が含まれますが、薬剤師の業務体制の点では、病床機能によらず共通の特徴がみられます。例えば、スタッフ間の距離の近さです。職員数が少ないことは、マンパワーや予算の点では不利ですが、一方で連携がとりやすく小回りが利くという点では有利であり、薬剤師が医師をはじめとする他職種と協働で薬物治療に関与する体制を構築するのは比較的容易で、新規業務も導入しやすい環境にあります。また、兼務の多い業務体制も特徴と言えます。個々の業務としては専任者を置くほどの仕事量がなく、特定の業務にのみ集中して取り組むのが困難な場合もありますが、水平方向に展開させることは可能です。

このように、業務体制に関しては、中小病院は大病院の単なるミニチュアとして捉えることはできませんが、その特徴を活かし先進的な取り組みを実施していても、必ずしも論文や学会発表として発信されているとは限らず、中小病院における薬剤師の業務に関する情報は大病院と比較して多いとは言えません。

その結果、業務を展開する際に、条件の異なる大病院の事例を参考にせざるをえず、新たな業務への取り組みを困難にしています。病院の規模を分類する明確な基準はありませんが、200床未満の病院の数は全国の病院の7割を占めていますから、病院薬剤師として新しく取り組むべき業務があっても、中小病院で取り組めていなければ業務として定着したとは言い難いでしょう。

また、医療資源を効果的かつ効率的に活用するために医療機能の分化が進み、病院完結型ではなく、地域の医療機関が連携して治療に臨むことを考えると、患者が退院する際に病院薬剤師と薬局薬剤師との連携が必要であるように、患者が転院する際には病院薬剤師どうしの連携が必要となりますが、高度急性期機能を担う大病院の薬剤師とポストアキュートを担う地域の中小病院の薬剤師など、規模や機能の異なる病院ではお互いの業務体制や地域医療において果たす役割が十分に理解できておらず、連携がうまくいかない場合もあります。

委員会活動を通じて中小病院における薬剤師の業務に関する情報を広く共有していくことで、中小病院の薬剤師が業務を展開する手助けになるとともに、大病院に勤務する薬剤師にとっても連携相手の業務について理解するきっかけとなり、結果として、病院の規模や機能の特徴を活かした連携が進み、地域医療の充実につながることを願っております。